



i-Reporter

導入事例

出荷時の検査記録帳票を電子化した事例

(京都電機器株式会社)

出荷時の検査記録帳票を電子化した事例

京都電機器株式会社（パワーエレクトロニクス事業・オプトエレクトロニクス事業）

京都電機器株式会社は、京都府宇治市に本社を構え、設立から62年を迎える老舗の電源メーカー。携帯電話やパソコンの部品を製造する機械の電源の他、発電機に内蔵されているインバーター装置、バッテリーフォークリフトの充電器を製造している。回路設計、ソフト設計から構造設計、生産設計から各種シミュレーション、各種評価設備・検査設備を備えており、一貫したモノづくりで製品を提供できる企業だ。

同社では検査データなどの報告書を紙で運用していたが、取引先よりデータのデジタル化要求があったことをきっかけにi-Reporterを導入。帳票の電子化により作業工数が削減され、記録の精度も向上したことで、業務効率が大幅に向上したという。



USER'S VOICE



当社は携帯電話やパソコンに使われている部品を作るための機械装置を動かす電源装置を製造しているメーカーです。生産技術部門では社内で設計から製造まで行う内製を基本としており、組み立てや検査の自動化を進めていることが強みだと考えています。

（製造部 部長／上田 憲英 氏）



製造本部長が「何故ドライバーとボールペンの両方を持つ必要があるのか、何故紙を持たなければいけないのか」と作業のあり方に違和感を抱いていたところ、取引先よりデータの電子化要求がありました。これを好機と捉え、i-Reporterの導入に踏み切りました。

（製造部 第二生産課 主任／田中 健志 氏）

INTERVIEW

YouTubeでインタビュー動画を公開中！実際の活用事例や効果について教えていただきました。



**作業工数約30%、確認工数92%削減を実現！
今後のさらなる業務効率化を目指して**

抱えていた課題・導入後の効果・今後の展望...詳細は次ページへ ▶

効果
導入前

多くの製品情報を1枚に記載するため記録欄が小さく書きにくさから記録漏れが発生し、記録も見づらい

紙帳票の経年劣化により視認性や可読性、保管の品質にも問題が生じている

荷姿撮影と上司への確認の度に事務所と現場とを往復しなければならない

i-Reporter
導入後

1台の製品につき1帳票の帳票を構成記録しやすく、見やすい電子帳票が実現

データがサーバー上で管理され印刷する必要がなくなった

記録と写真撮影、上司への確認がその場で一度に行える



資材調達部
生産業務課 主任
辻川 佳督氏

現場の声

出荷する前のシリアル番号や機種名の最終チェックにi-Reporterを使用しています。シリアル番号や機種番号は数字の羅列なので間違いが起こりやすいのですが、チェック時にカメラ機能を使って撮影した写真データと紐づけることで間違いなく出荷できるようになりました。

現場の声

i-Reporter導入により、荷姿撮影時にカメラを準備する時間と移動のロスがなくなり、ワークフロー機能を活用することで上司への確認・承認のためのフロア移動も不要になりました。これにより、作業時間が30%、確認時間が92%削減されました。デジタル化によりプリンターの使用量も減少し、保管スペースの有効活用も実現できました。

さらに、特定の項目に対して選択式で入力を完結できるようにしたことで、外国人労働者にも扱いやすい形で電子帳票を活用できています。



製造部
第二生産課 主任
田中 健志氏

現場の声

紙の帳票だとたくさん文字を記入する必要があったのが、電子帳票になってタブレットにタッチして○をつけるだけでチェックが済むようになり作業がとても楽になりました。



製造部
第二生産課
山田 朋美氏

現場の声

i-Reporter導入により紙の保存がデータ化されたことで、過去の記録を閲覧する際も倉庫まで行く必要がなくなり、作業効率が向上しました。



製造部
第二生産課 課長
大口 一典氏

i-Reporter導入の経緯と今後の展望

さらなる作業効率の向上を実現に向けて
ホストコンピューターと連携を行いたい



製造本部 取締役製造本部長 小島 亨氏

当社の製品では、製造に必要なデータとして16桁の製造番号、15桁の部品コードというものがあり、数字だけでなくアルファベットも含まれるため、これらを手動で入力するには非常に手間がかかるという課題があります。

現在、i-Reporterをホストコンピューターと連携し、i-Reporter側に入力したキーワードをもとに、ホストコンピューターからマスターデータなどを取得できる仕組みの開発を進めています。具体的には、i-Reporterにキーワードを入力すると、基幹システムよりマスターを取得できるようにする、といった連携が行えます。また、バーコードリーダーをつなげることで、伝票のバーコードもi-Reporterの入力工数削減に活用できないかと検討中です。こうした取り組みを実現することで、現場作業者は様々な製品情報を手入力することなく帳票に記録できるので、これまで以上に生産性を向上したいと考えています。



CASE REPORT